

インタビュー

一人ひとりが学び方を選ぶ力を

「ICT×インクルーシブ教育」の視点から、デジタル端末やデジタル教科書を活用し、さまざまな子どもがいっしょに学ぶ授業づくりに取り組まれてきた
東京学芸大学附属小金井小学校の鈴木秀樹先生にお話を伺いました。



——「令和の日本型学校教育」では、従来の

「個に応じた指導」から、「個別最適な学び」として、子どもからの視点が強調されています。

教師は、ついつい「この子にはこれがいい」と考え、一方的に支援・指導してしまいがちです。しかし、本来は、子どもが自分で最適な方法を選択できる力をつけていかないとけません。

そうした視点からも、「個別最適な学び」が子ども目線で言われるようになったのは、とてもいいことだと思います。

——学び方を選択する力をつけるためには、

どのような指導をすればよいでしょうか。

教師が子どもにいろいろな経験をさせてあげることが大切です。例えば、ディスレクシア傾向の子の支援には、読んでいる箇所を定規をあてる、音声読み上げ機能を使う、デジタル端末で拡大するなど、いろいろな方法があります。それらの方法を紹介して、子どもに選ばせるのがよいと思います。

私は授業の中で、普通は教師が範読する場面でもデジタル教科書に読ませるなどして、クラス全員がデジタル教科書の機能について知る機

会を設けるようにしています。普段からいろいろな方法があることを見せていくことが大事ですね。紙の教科書に比べてデジタル教科書はカスタマイズの幅が広いので、使用環境が整ってきたことは、指導上とてもありがたいです。

——先生がデジタル教科書やICTの活用方法を知っておかないといけませんね。

確かに、教師はいろいろな方法を知っておかなければなりません。ICTでは、子どもが新たな使い方を見つけることも多いんです。

例えば、マイ黒板（P5図1）を見せ合い

ながら、交流するという場面では、画面上の付箋に書いておいたものを最小化しておき、自分の話に合わせて大きく表示するなど、教師の想定しない使い方を考え出す児童の姿が見られました。こうした新しい方法も、他の子どもにシェアしながら進めていくとよいですね。

——いわゆる「浮きこぼれ」といわれる児童には、どのように対応していますか。

学力や学習意欲が高く、ただ普通に課題を出すだけでは、簡単でつまらないという子もいます。そういった子には、「もっと完成度を高めたい」「詳しくしたい」とのめり込める、試行錯誤できる環境を作ってあげるのが大切です。

例えば、自分の考えを一枚のスライドにまとめる課題でも、「二枚にしていから、変化が分かるようにしてごらん。」などと幅を広げてあげる。そういったことも、紙の教科書だけの頃よりもずっとやりやすくなりました。

——個で学んだことをクラス全体の学びにつなげるにはどうしたらいいでしょうか。

やはり、子どもにしっかりと目をむけることです。子どもたちは、一人ひとり違いますから、学ぶ方法が違って当たり前。一人ひとりに目を向け、適した学び方を見つけていく意識が大切だと思います。

また、子どもが自分で選ぶ力をつけるまで、教師が待つことも大切です。短期的には、もちろん教師が先導したほうが成果は上がりやすいので、どうしても、教科の目標を達成するために適切な支援は何か、という発想になってしまふ。しかし、長期的にみれば、子どもが自分で選ぶ力をつけないと意味がありません。教科の中だけではなく、将来生きていくために必要な力をつけるという発想にならなければならないと思います。

子どもたちの学び方の幅が広がるような取り組みが、今後ますます広がっていくことを期待しています。

鈴木秀樹
(すずき・ひでき)
東京学芸大学附属小金井小学校教諭。マイクロソフト認定教育イノベーター。「ICT×インクルーシブ教育」の視点から研究・実践に取り組む。

マイ黒板、ベン図、表など、児童が自分に合った方法で、読みをまとめたもの。
いずれも「国語デジタル教科書」を使用。

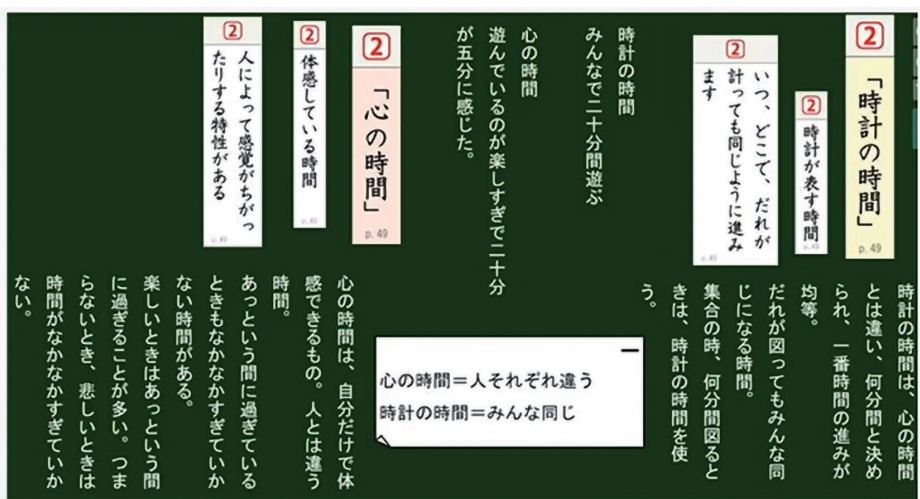
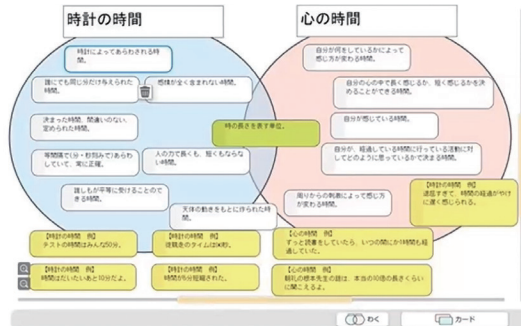
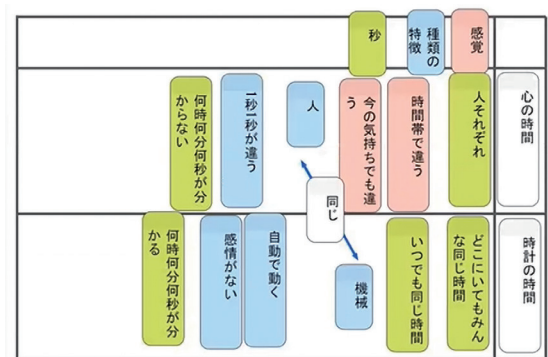


図1：マイ黒板



一つの教材について、個々に目的やゴールが違うという場合は、交通整理が必要です。例えば、六年「やまなし」で、「かにの兄弟の心情を追いたい」「やまなしが落ちてきたときの衝撃について深めたい」と子どもたちはいろいろなことを言い出します。その場合は、読み合う時間をしてしっかりとる、発表する機会を作るなど、何かしらの手立てを講じないと、バラバラになってしまいます。子どもたちが学習結果を共有し合わないと、クラス全体の学びになりません。教師にとっても、無理のない形で、それぞれの学びを見取れるようにしなければならない。大きな意味での授業デザイン力が必要になってくると思います。

——学習過程の共有にもICTは効果的ですか。

現在、感染症対策として、教室内でも、Teamsを使用し、話し合いながら一枚のスライドを編集していくということをしています。学習の過程がよく見えますし、評価をするときにも、たどろうと思えばたどれるのがよいですね。

さらに、子どもたちがお互いの学習過程を共

有できるのもいいことだと思います。学習者用デジタル教科書は、Teamsなどの共有できるツールを組み合わせることで、よりその価値が高まると思います。

——ご実践を通して、先生ご自身にはどのような変化がありましたか。

子どもに活動させないと、選ぶ取る力が伸びないので、私が授業中に話す時間が減りました。最初にグループピングして、取り組むことを確認して、そのあとは子どもたちだけで進めていきます。その中で、子どもたちも、試行錯誤するようになってきたと実感しています。ある児童は、学習内容をまとめる際に、表からマイ黒板、ベン図など、デジタル教科書のさまざまな機能を使って、まとめ方を試行錯誤していました。その時間内では完成に至らなかったのですが、自分で学び方をカスタマイズしていくという大事な力が身につけてきていると思います。

——教師自身が新しい学び方に対応していくには、どうすればよいのでしょうか。